

## [研究論文]

### 摺物にみる方広寺大仏殿開帳について

黒川 真理恵

#### はじめに

京都東山の方広寺は、鐘銘事件の大鐘で知られているが、近世期には、大仏殿も存在した。寛政10年(1798)に雷火によって焼亡し、天保3年(1832)に再建のための開帳が行なわれることとなった。その際、見立番付や、はやりうたなど、様々な摺物が出版された。本研究では、それらの摺物を取りあげ、開帳を再構成するとともに、開帳を取り巻く人々について考察することを目的とする。

#### 1. 方広寺について

##### 1-1 沿革

方広寺は、天正14年(1586)、豊臣秀吉の発願によって建立された。『史料京都の歴史』第10巻によると、奈良の東大寺に倣って大仏が安置され、その高さは六尺三丈(約19メートル)あったという。建立以来、幾度かの地震・火災に遭難したが、その度に再建されることとなった。

まず、慶長元年(1596)、大地震によって破壊し、同7年(1602)には火災によって焼亡した。同19年(1614)秀吉の嗣子秀頼によって再建され、このとき鑄造されたのが、鐘銘事件で有名な大鐘である。「国家安康 君臣豊楽」の銘文が、徳川幕府に反逆するものとして、豊臣家滅亡のきっかけとなったとされている。

寛文2年(1662)にも地震で倒壊したため、同4年(1664)木造に造り直された。破壊された大仏は、幕府によって寛永通宝に改鑄されたという。安永9年(1780)刊の地誌『都名所図会』(資料1)には、再建された木造の大仏殿が描かれている。

寛政10年(1798)の雷火では、大仏殿を含む境内の諸堂宇すべてが焼亡してしまった(『方広寺関係文書目録』解題)。このときは、すぐの再興はならず、尾張・伊勢・美濃・越前の人々の寄進により、天保14年(1843)に木造半身の大仏が再建された。しかし、その大仏も、昭和48年(1973)の火災によって焼失し、現在は本堂・大黒天堂・大鐘楼を残すのみとなっている。

##### 1-2 大仏殿開帳について

寛政10年の雷火ののち、再建がなされたのは約40年後の天保14年だが、『方広寺関係文書目録』解題によると、それまでにも再興の動きはあった。天保3年(1832)に、再

建の資金を集めるためとして開帳が行なわれた。その際、<sup>ごほうろく</sup>展覧目録である「御宝録」（資料 2）（注 1）が出版された。前書きを以下に記す。

洛東方広寺大仏殿は、久代聖武皇帝南都の例に准じて、豊臣秀吉公四海の騷擾を諷たまひ、天正十六年に列国の諸侯に命じ、纔一歳乃間に創建なさしめ給ふ。今時天保三年まで、都て式百四十五年にいたる。然るに寛政十年のとし、雷火の為に、御尊躰および仏殿、楼門、廻廊にいたるまで、忽ち灰燼とはなりぬ。都鄙、貴賤の歎哭限りなく、再造をはかるの力もたるみ、勸進を催さんの勇もなくして、空しく三十余年の星霜を過けるところに、此度御修造の御催これあるに就て、慶長、寛政兩度の焼災にもつゝがなく残りまします眉間籠の釈迦如来、三天合躰の大黒天等を大仏殿仮堂におゐて、御開扉あらせられ、太閤秀吉公の御装束并御手道具類あるひは韓人の衣裳のたくひは御殿内におゐて拝覧御赦免あり。日限は三月十一日より始て五十日の間なり。将又御宝器数々ありといへども、御文庫に蔵あつて、御大切の品なれば、その大抵を拝見に逮ぶ。原当山は豊国社頭の旧蹟なれば、都鄙の庶人にいたるまで、幸に参殿し、此御宝物の目録をもつて、其名器の数々を謹で拝瞻に及ぶべき者也。

天保三歳辰三月

（「御宝録」前書、下線筆者）

「御宝録」前書きによると、開帳は、天保 3 年の 3 月 11 日から 50 日間の予定で始められた。大仏殿仮堂が作られ、<sup>みけんごもり</sup>眉間籠の釈迦如来、三天合体の大黒天、秀吉の装束、手道具類が展示された。眉間籠の釈迦如来というのは、大仏の眉間に込められていたもので、雷火の際に焼け残った（注 2）。

また、天保 2 年（1831）～嘉永 2 年（1849）までの風聞雑記『事々録』（注 3）には、大仏開帳の記事がある。天保 3 年の項には、以下のようにある。

春の末より京師方広寺にて寛政十年年七月雷火烧亡の大仏の腹籠の仏を開帳す。焼亡より今年迄三拾五年に及べり。僧俗よりて十分の一の大仏を作らんなど企つ。什物など多く見せけるが、殊の外群集して夏の半に至りて止ム。

（『事々録』天保 3 年）

「大仏の腹籠の仏」とあるが、「眉間籠の釈迦如来」と思われる。季節は「春の末」より「夏の半」とある。当初は 50 日間の予定で始められたが、見物人が予想以上に多く、夏まで延長することになったようである。

また、平戸藩主松浦静山による随筆『甲子夜話』にも、大仏開帳に関する記述がある。『甲子夜話』には、文政4年(1821)～天保12年(1841)までの事柄が記されている。「続編八十五」(注4)に、京都からの伝聞として記されている。

- △ 大仏殿焼亡の跡には、矢来を結繞はし、其中に路を通じ、燼余の仏像、其他をも人に見すると云。
- △ 右再建の体は、諸所より寄附の金子、十両千疋五百疋など、夥しく札に記し、造花など飾りて、其枝につけ有ると云。
- △ 又大仏殿の脇、長屋などは、はや建かゝり、日を追ひ成就のさまなりと。思ふに廻廊か。

(『甲子夜話続篇』85)

同じく『甲子夜話』には「大仏殿之絵図」(資料3)も収載されている。「御開帳万人講」「御普請」「日吉社」「用木世話方」などの幟を立てられ、人々が押し寄せる様子が描かれている。賀茂川からは普請のための用木が引き上げられ、それを河原で見物している。「大仏殿の脇、長屋などは、はや建かゝり」とあることから、おそらく、再建のための普請が始まったものと思われる。

しかし、完成には至らなかった。『甲子夜話』校注によると、絵図には以下のように記されているという。

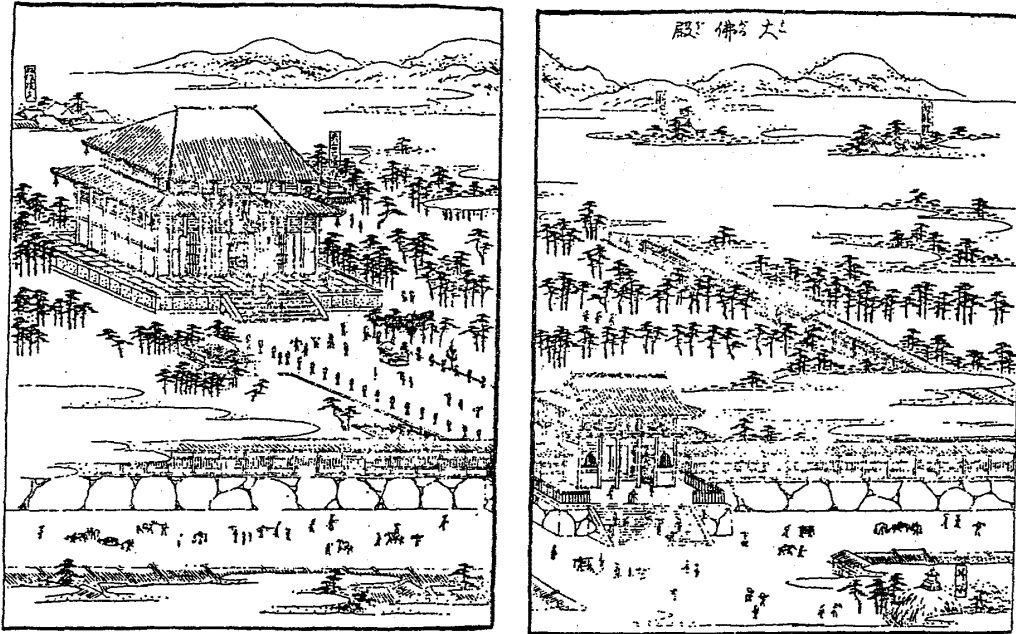
…(前略)… 今御普請につき、御開帳有之。此図を出し候もありがたき御代に時来り、時節至て御造営に付、此絵図を以、過し昔の事共予じめ願之者なり。

(『甲子夜話続篇』85校注)

このことから、描かれた大仏殿は、実際に再建されたものではなく、完成予想図を描いたものと思われる。

資料 1 方広寺大仏殿

（安永 9 年（1780）『都名所図会』（竹村俊則（編）1981：62）より転載）



大仏殿

資料 3 大仏殿之絵図

（『甲子夜話』（中村；中野（校訂）1981：241-243）より転載）





## 2. 絵本太功記見立番付について

## 2-1 絵本太功記について

天保3年の開帳は、浄瑠璃の絵本太功記に見立てられた。資料4は、見立番付「大仏殿再建御開帳ニ附 太功記 十日目文句見立」（注5）である。「大仏殿再建御開帳」とあることから、方広寺大仏殿開帳に際して作られたものと思われる。最後の枠には、「大仏のかねて噂の高ければ撞かねど四方に響く開帳」とある。「かねて」と「鐘」をかけている。また、「鐘」が「響く」と「開帳」が広まるという意をかけている。題材に絵本太功記が選ばれたのは、方広寺が秀吉の発願によって建立されたためだろう。左下の瓢箪は、秀吉の千成瓢箪を示す。

浄瑠璃の「絵本太功記」は、近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒の合作である。明智光秀を主人公とし、信長への謀反から秀吉に討たれるまでの物語となっている。天正10年6月1日から13日までの出来事が、一日一段、全13段で構成されている。

初演は、寛政11年（1799）7月12日、大坂道頓堀豊竹座である。『義太夫年表』によると、寛政11年から天保3年までの、京・大坂における上演記録は、表1の通りである。絵本太功記は、絵本太功記の別名題であるため、これも上演記録に含めた。初演以来、約30年の間に、少なくとも15回は上演されている。絵本太功記は、天保3年当時、すでによく知られていた題材だったといえる。なお、開帳直前の上演記録はみつからなかったが、開帳後の天保3年9月、大坂稲荷境内において上演されている。

表1 絵本太功記（絵合太功記）上演記録

（『義太夫年表』第2・3巻より黒川作成）

上演年月日	西暦	上演場所	備考
寛政11/7/12	1799	大坂/道頓堀若太夫芝居	
寛政12/8/16	1800	大坂/北之新地芝居	
享和3/1/2	1803	大坂/堀江市の側西側芝居	
文化6/1/14	1809	大坂/御霊社内	絵合
文化8/1/吉日	1811	大坂	絵合
文化8/閏2/4	1811	大坂/御霊社内	絵合
文化11/2/4	1814	京/和泉式部境内芝居	
文化11/8/15	1814	大坂/道頓堀若太夫芝居	絵合
文化12/8/23	1815	大坂/座磨社内	絵合
文政2/11/16	1819	大坂/稲荷社内	絵合
文政4/12/28	1821	大坂/稲荷社内	絵合
文政6/2/吉日	1823	京/四条北側芝居	絵合
文政9/7/26	1826	大坂/高津社内稽古場	絵合
文政10/1/2	1827	大坂/稲荷社内	
天保1/8/10	1830	大坂/御霊境内	絵合
天保3/9/17	1832	大坂/御霊境内	絵合

資料4 「大仏殿再建御開帳二附 太功記 十日日文句見立」  
 (大阪府立中之島図書館所蔵『保古帳』巻13)

大佛殿再建御開帳二附  
 太功記  
 十日日文句見立

美体どろろく あまどつき	寝どろ ねまん	乍ハとぞん ををんよ	大佛再ん 尤合一段不
をころち うたさぎ	内陳のつて このむ人	糸袋中 のものを	さへん 考進
とくふりええ 釜のきむ	さつと心茶 のむ人	百舌どくふ まきまや	下女丁粧の 考進
さしりのち まきま	をまんれ まきま	手巻とまがつて 三子余珍	再進 條中
からろをまき ゆ一まむく	田舎の親れ とまきま	せんとのんぞ まきま	考進不 まきま
つおさふされ まんとえん	まきまの まきま	ま一友が親れ まきま	考進不 まきま
かいつ入り まきま	まきまの まきま	まきまの まきま	考進不 まきま
まきまの まきま	まきまの まきま	まきまの まきま	考進不 まきま
まきまの まきま	まきまの まきま	まきまの まきま	考進不 まきま
まきまの まきま	まきまの まきま	まきまの まきま	考進不 まきま

八伴のうてくまきまをいふつらむとまきま



大仏殿再建 御開帳 附 太功記 目十文句見立

異儀をただしく 両手をつき	宝もつ 拝けん	印ハもくぜん 是を見よ	大仏再こん 廿分一絵図
近ころ申 かねたれど	内陣のつて たのむ人	京洛中 のもの共へ	さいこん 寄進
うへに引しめ 釜のそば	せつたい茶 のむ人	百萬ごくに まさるそや	下女丁稚の 寄進
はる／＼のみち ようこそ／＼	遠国の 参けい	手勢をすぐつて 三千余騎	再建 講中
おこころ置なう 御一しゆく	田舎の親るい を呼に遣る人	めにも見せて くれんずと	寄進に はりこむ人
とかういふうち 時こくがのひる	草り返しの 群集	ま一度お顔か 見たけれど	普請成就を 待兼る老人
とういそがる／＼ ものそいのと	れいほう 群集	覚悟きハめし このからだ	開帳中 ふしん中 折かゝる出入方
やうすハいかに つぶさにかたれ	れいほう はいけんの噂 きく人	くれ／＼の ねかひゆへ	御宝録 井二ゑんき うる人
眼下の村手を きつと見下し	御庭の亭 より拝見する 人々	しらぬこと／＼ハ い／＼ながら	切手明しに御庭 拝見に行 田舎衆
おい／＼入り 来る	開帳 あかりもの	此みのねかひ かのふたれハ	瑞泉寺 相伴出開帳
互ひの 身の仕合せ	境内掛茶店 大ふつもちや	たしかに夫と 承らねと	養源院 開帳の噂
心のこりの ないやうと	書付と引合 して宝物 みる人	ほめらるゝのを 楽しみに	世話方 頭取

大仏のかねてうはさの高けれハつかねと四方にひ／＼く開帳 評判 吉述



## 2-2 見立番付について

見立番付でとりあげられているのは、絵本太功記十日目の段、尼ヶ崎閑居の場である。以下に、浄瑠璃のあらすじと詞章を記す。下線は、番付に引用されている部分である。

光秀の母皐月は、光秀が、主人である信長を討ったことを知り、先祖に申し訳が立たないといって城を出てしまう。独りで暮らす母皐月のもとへ、光秀の妻操が嫁の初菊を伴って見舞いに来る。皐月は「ヲゝ珍しい嫁女孫嫁。はるぼるの道ようこそようこそ (1)」といって二人を迎える。嫁達は「前垂襦の上に引きしめ茶釜の傍 (2)」と、身の回りの世話をしようとする。操が訪ねて来たのは、息子十次郎からの出陣の願いを「くれぐれの願ひ故 (3)」皐月に取次ぐためだった。

そこへ旅僧に変装した久吉(秀吉)が、「諸国修行の一人旅。近頃申兼たれど (4) 御宿の報酬に預りたし」と一夜の宿を求めに来る。皐月は「お心置なふ御一宿 (5)」といって迎え入れる。

入れ違いに、光秀の息子十次郎が登場し、「異義を正して両手をつき (6)」出陣の許しを請う。その心中では「けふ初陣に討死と。覚悟極めし此骸 (7)。お暇乞に参りしと。しらせ給はぬ悲しや」と、討死の覚悟を決めている。

出陣が許されるとともに、初菊との祝言も挙げることとなった十次郎は、次のように独白する。「母様にもばゝ様にも。是今生の暇乞。此身の願ひ叶ふたれば (8)。思ひ置く事更になし」「初菊殿。まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ (9)。わしが事は思ひ切。他家へ縁付して下され。」

それを聞いていた初菊は、出陣を思い留ませようとするが、十次郎の決意は固く「とかふいふ内時刻が延る (10)。其鎧櫃爰へ」と出陣の仕度を促す。初菊は、「いとしい夫が討死の首途の物の具付るのがどふ急がるゝ物ぞいの (11)」と泣く泣く手伝う。

初菊と祝言をあげた十次郎は、戦場に赴く。十次郎の討死の決意は皐月にも知れており、「祝言によそへて盃をさしたのは。暇乞やら二つには心残りのないやうと (12)。思ひ余った三々九度。ばゞが心のせつなさを推量仕や」といって、操、初菊とともにうち歎く。

日が暮れ、久吉の跡を追って来た光秀は、母の住処に久吉が潜んでいると思い、部屋の一間に竹槍を突き入れる。ところが、それは久吉ではなく母皐月で、わざと身代わりになって刺されたのだった。皐月は「仁義忠孝の道さへ立ば。もつそう飯の切米も。百万石にまさるぞや (13) … (中略) …しるしは目前是を見よ (14)」と主君殺しの天罰であるとして、光秀を諫める。これを見ていた操も、「しらぬ事とは云いながら (15) 現在母御を手にかけて。殺すといふは何事ぞ」と、涙ながらに諫言する。

そこへ十次郎が深手を負って馳せ帰る。光秀は「様子はいかに。具に語れ (16)」と問いたです。十次郎は「手勢すぐつて三千余騎 (17)」。初めは善戦したものの、久吉の家臣加藤正清に「目に物見せてくれんずと (18)。いふより早く太刀抜かざし。四角八面に切

り立てられ」敗戦に追い込まれたことを物語る。四方天田島頭の行方を尋ねられるも、「乱軍なれば生死の程も。慥にそれと承はず (19)」とのことだった。

ついに瀕死の十次郎は、「今一度お顔が見たけれど (20)。もふ目が見へぬ父上。母様初菊殿。」といて息絶える。操は「適高名手柄して。父上やばゞ様に誉らるゝのが楽しみと (21)。につと笑ふた其顔がわしや幻にちら付いて得忘れぬ」と悲嘆にくれる。光秀も、母皐月の意想外の死、息子十次郎の戦死を目のあたりにし、はらはらと涙を流す。

光秀は庭先の松の枝から、「眼下の村手を佐度見下し (22)」様子を探る。久吉が現れ、勝負は天王山で決することとなる。光秀は「一先都に立帰り京洛中の者共へ (23)。地子を赦すも母への追善」といって、地税を免除することとする。「沖は中国より追々入来る (24)数万の兵船」とあるように、久吉側の軍勢が集結しつつあることを示唆して終わる。

絵本太功記の主人公は光秀だが、十段目に限っては、物語を展開するのは皐月と十次郎である。十次郎の場合、前半が初菊との別れと出陣、後半が討死の山場となっている。以下は、番付のなかで、十次郎の台詞が引用されたものである。

- 6「異儀をただしく両手をつき／宝物拝見」
- 10「とかふいふ内時刻が延びる／草履返しの群集」
- 9「互いの身の仕合せ／境内掛茶屋大仏餅屋」
- 17「手勢をすぐって三千余騎／再建講中」
- 18「目にももの見せてくれんずと／寄進にはりこむ人」
- 20「ま一度お顔が見たけれど／普請成就を待兼る老人」
- 7「覚悟きわめしこのからだ／開帳中普請中折の高出入方」
- 8「此身の願い叶たれば／瑞泉寺相伴出開帳」
- 19「たしかに夫と承らねど／養源院開帳の噂」

例えば、6「異儀をただしく両手をつき」というのは、浄瑠璃では、十次郎が出陣を願い出る場面である。それが、開帳では「宝物拝見」となる。人々が、かしこまって宝物を拝見する様子と、十次郎が出陣を願い出る場面が重ね合わされている。十次郎の場合は生死をかけた行動であるのに対し、見物人にはそれがない。その落差を、番付を読む人は楽しんでいただけないだろうか。

### 3. 開帳を取り巻く人々

#### 3-1 参詣人

番付には、参詣に訪れた人々の様子が取り上げられている。京都市中のみならず、近隣

からも人々が集まった。

「はるばるの道ようこそようこそ／遠国よりの参詣」

「お心置きのう御一宿／田舎の親類を呼びに遣る人」

「近頃申しかねたれど／内陣のつて頼む人」

「上に引きしめ釜のそば／接待茶飲む人」

宝物拝見の様子は、次のように述べられている。

「異議をただしく両手をつき／宝物拝見」

「とこういう内時刻が延びる／草履返しの群集」

「どう急がるるものぞいのと／靈宝群集」

「様子はいかにつぶさに語れ／靈宝拝見の噂聞く人」

開帳は、はやりうたの題材にもなった。京都で音曲物を出版した版元に、阿波屋定次郎がいる。阿波屋は、安永期頃（1770年代）から宮藺節の詞章本を出版し、文化・文政・天保期（1800～1830年代）に、はやりうたの唄本を出版した。阿波屋が出版した詞章本は、はやりうただけでも現在までに105点が確認されている。そのなかのひとつに、「しな川ぶし 京名所独案内」（資料5）（注6）がある。以下に全文を翻刻する。

しな川ぶし <sup>みやこめいしよひとりあんない</sup> 京名所独案内 京寺町にしき上ル 阿波屋定次郎板

- ▲ 大佛に。ことしはまれなごかいてう。  
てを引あふてさんけいや。かずのほうもつありがたひ
- ▲ みづつかに。三十三げん堂みても。  
つりがね堂にしやかによらい。きいてよろこぶごこんりう
- ▲ ふくのかみ。いのればこゝにさいはいの。  
いなりのおみやどうふくじ。秋にはもみぢがまつさかり
- ▲ 藤のもり。もつれつよれつふかくさの。  
ももよかよへどせんゆうじ。五山なだかきけんになんじ
- ▲ みゑくとて。きせん大師へさんけいの。  
て引そで引青やぎに。なびくしまばら三すし町
- ▲ くまがへの。その名のこせしくろ谷や。

しんによどう 樂 園 寺 南 禪 寺 にやくわうじ  
真如堂にぎんかくじ。それなんぜんじ若王寺

▲ 松かぜの。おとはのたきのきよみづや。

さりても八さかとうとふて。心やすいとかうだいじ

▲ ちおんいん。ひがんのさくら長らくじ。

こがね花さくいろざとに。ぎおんばやしあけの明がらす

▲ 都みやことて。ほかにたぐひはありがたい。

ごしよ 御所のおにはをふしおがむ。吉田よしだゑい山弁才天べさいてん

○ 此つゞき都名所 かはりもんく 下の巻に御座候

（「しな川ぶし 京名所独案内」）

開帳に関する部分は、第一節と第二節である。刊年は記されていないが、「大仏に今年  
はまれな御開帳」「数の宝物ありがたい」とあることから、天保3年の開帳に際して作ら  
れたものと思われる。「釣鐘堂」は鐘楼、「釈迦如来」は眉間籠の釈迦如来、「聞いて喜ぶ  
御建立」は大仏再建を示す。よって、表紙は、方広寺の大鐘と参拝客を描いたものである  
（注7）。

京都では、『京童』（明暦4年(1658)）を初めとして、『京雀』（寛文5年(1665)）、『京羽  
二重』（貞享2年(1685)）、『都名所図会』（安永9年(1780)）など、様々な名所案内記が出  
版された。それらには、寺社の縁起や、季節ごとの名所が解説されている。はやりうたの  
場合は、それらを端的に述べた名所尽しとなっている。方広寺の開帳は、名所のひとつと  
して捉えられていた。

資料5 「しな川ぶし 京名所独案内」

(大阪府立中之島図書館所蔵 郷土資料 228/94(42))



3-2 掛茶屋・大仏餅屋・摺物について

番付には、「互いの身の仕合せ／境内掛茶屋大仏餅屋」とある。大仏餅屋というのは、方広寺門前にあった隅田屋という餅屋である。名物大仏餅が評判だった。『都名所図会』には、店先の様子が描かれている（資料6）。

境内には掛茶屋も多くあった。京都の咄家、都喜蝶による噺本「落咄大仏柱」には、掛茶屋の多さがでてくる。都喜蝶は、文政・天保期に上方で活動した咄家である（宮尾 1996）。「落咄大仏柱」（注8）には、19話が収録されており、そのなかのひとつに「釈迦の齋散」という噺がある。以下に一部翻刻する。茶屋の数が290というのは誇張だろうが、それほど多かったということだろう。

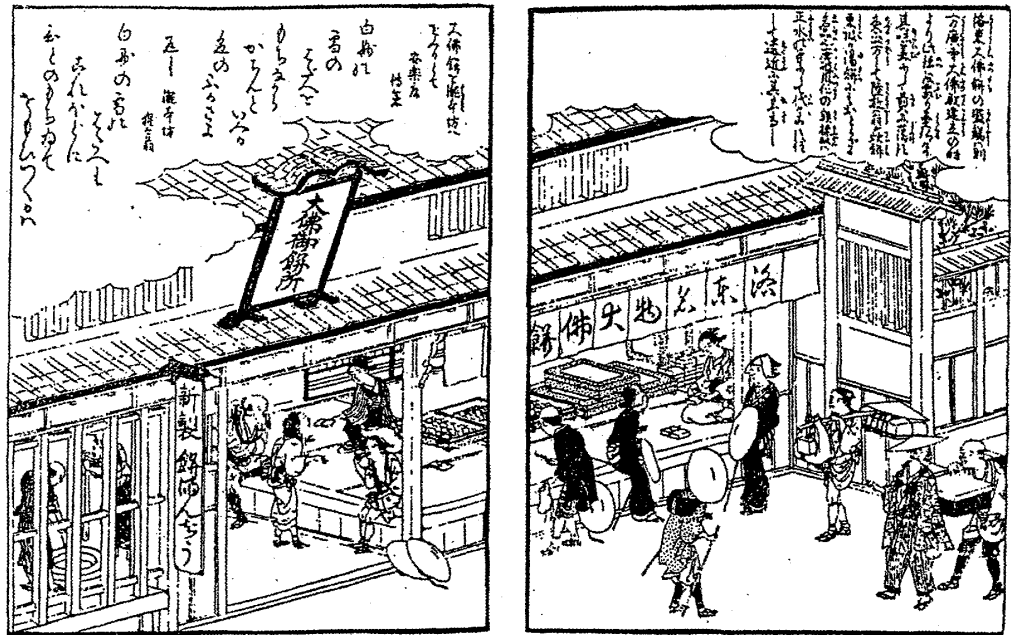
釈迦の鬱散

釈迦如来、日々の参詣に大ひにくたびれたまひて、ちときバラしに、夜ぶん御けいだいを、ぶらぶらと見廻りたまひ、茶やの夥しきにおどろき、小口よりかぞへ給ふに、凡式百八、九十軒もあるに笑をもやふし …（後略） …（「落咄大仏柱」）

また、「くれぐれの願ひ故／御宝録并に縁起売る人」「心残りのないようと／書付と引き合して宝物見る人」「印は目前是を見よ／大仏再建二十分の一絵図」（注9）というように、摺物も売られていた。

資料6 方広寺門前大仏餅屋

（安永9年（1780）『都名所図会』（竹村俊則（編）1981：63）より転載）



洛東大仏餅の産地は、すなはち方広寺大仏殿建立の時よりこの銘を繋り、売り弘めける。その味、爽にして煎（に）るに落（とろ）けず、実（あよ）るに芳（かんばしう）して、陸放翁が炊（すい）餅、東坡が瀉餅にもおとらざる名品なり。唐破風作（からはよづくり）の額標版（かんばん）は正水の筆にして、代々ここに住して遠近にその名高し。大仏餅を滝本坊へおくとて 安樂庵茶伝 白妙の雪のはだへをもちながらちんといへる色のよかさよ 返し 滝本坊狸々翁 白妙の雪のはだへもこれほどにひとのもちりておもひつくかは

### 3-3 寄進について

早稲田大学附属図書館蔵「方広寺関係文書」には、大仏殿再建に関する資料が残されている。文書解題によると、「方広寺大仏殿と関係はあるが、直接同寺にて旧蔵されていたものではない」。出所については、「文書中の宛名に多くみえる方広寺境内南梅屋町の中村家が考えられる」が、未詳とのことである。文書数は1362点あり、なかでも「寛政～天保の大仏殿再興期の講を中心とした金融関係のものが圧倒的に多い」。本論文では、「普請」に分類された文書に着目する。

大仏殿再建にあたり、境内町屋から方広寺へ寄進がなされた。そのときの証文によると、天保2年3月に上池田町、上棟梁町、西門町東組、同年5月に上下七軒町、7月に南桶屋町、本池田町、中塗師屋町、西門町東組借家中、10月に三拾三町組惣代、12月に上下七新町、12月に下塗師屋町、翌3年3月に上新之町が寄進を行なっている。宛名は、「大仏殿御寄進所 御役人中様」「御本所様」「御勘定所御役人中」「御世話方中」などである。金額は、「銀壹貫目」「青銅五拾貫文」などで、月賦にしていた。また、天保2年6月に湯屋仲間から青銅百貫文、同年8月に髪結仲間から青銅貳百貫文が寄進されている。番付にも「京洛中の者共へ／再建寄進」「百萬石に勝るぞや／下女丁稚の寄進」「目に物見せてくれんずと／寄進にはりこむ人」とあるように、大々的に行われていた。境内町屋の構成や、湯屋仲間、髪結仲間についての詳細は、今後の課題とする。

### おわりに

『甲子夜話』には、京の人々の話として次のように記されている。

京地の人の言にも、此度の再建は、東武へ願ひたるにも非ず。彼地の町人のみにて、金銀を聚め出来するの含みなりしが、思の外人気も引立ち、此勢にては再営も成就すべく、但し地面を狭くするか、又は堂を小さく為るかせずしては、公辺すまずと云ことと云。されば豊臣氏の威は、必世にして而衰ふるに非ずや。

(『甲子夜話続篇』85)

今回の再建は、幕府へ願い出てなされたものではなく、町人の寄進のみでなされたものがある、ということを主張している。『方広寺関係文書目録』解題によると、再建のため講が催されていた。そこでは、番付に「ほめらるるのを楽しみに／世話方頭取」とあるように、「世話方」が主導的な役割を果たしたと思われる。今後の課題としたい。

注

- 1) 中本一冊（117×175 mm）、11 丁、作者・出版者ともに不明である。これまでのところ 3 点確認されている。宮内庁書陵部蔵（206-310）。東京都立中央図書館蔵（東京誌料 3537-6）。京都府立総合資料館蔵（AK141.和/188.45/H82）。松浦静山（著）中村幸彦（校訂）『甲子夜話続篇』第 7 巻に所収・翻刻されている。
- 2) 「眉間籠の仏」として方広寺に現存。
- 3) 三田村鳶魚（校訂）『未刊随筆百種』第 6 巻所収。天保 2 年（1831）～嘉永 2 年（1849）までの風聞が集録されている。作者は不明だが、『未刊随筆百種』第 6 巻解説によると、上方勤番の武士とされている。
- 4) 中村幸彦（校訂）『甲子夜話続篇』第 7 巻所収。平戸藩主松浦静山による随筆。文政 4 年（1821）～天保 12 年（1841）までの事柄が記されている。
- 5) 大阪府立中之島図書館蔵（『保古帳』巻 13）。
- 6) 大阪府立中之島図書館蔵（郷土資料 228/94(42)）。中本一冊、二丁。
- 7) 第三節以降は、京都の名所尽しとなっている。列举されているのは、第三節は伏見稲荷と東福寺、第四節は藤の森、深草、泉涌寺、建仁寺、第五節は東寺と島原、第六節は黒谷、真如堂、銀閣寺、南禅寺、若王子神社、第七節は清水寺、八坂の塔、高台寺、第八節は知音院、長楽寺、祇園、第九節は御所、吉田山、比叡山、弁財天である。
- 8) 宮尾與男『上方舌耕文芸史の研究』所収。
- 9) 大仏殿の完成図で「二百分一絵図」と思われる。宮内庁書陵部蔵（「方広寺大仏殿図」206-310）。

参考文献（著者五十音順）

京都市（編）

1987 『史料京都の歴史』第 10 巻 東山区 東京：平凡社。

郡司正勝；他（監修）

1970 『名作歌舞伎全集』第 5 巻 東京：東京創元社。

竹村俊則（編）

1979 『日本名所風俗図会』第 7 巻 京都の巻 1 東京：角川書店。

1981 『日本名所風俗図会』第 8 巻 京都の巻 2 東京：角川書店。

中村幸彦；中野三敏（校訂）

1981 『甲子夜話続篇』第 7 巻 東京：平凡社。

林 英夫；青木美智男（編）

2003 『番付で読む江戸時代』東京：柏書房。

三田村鳶魚（校訂）



- 1927 『未刊随筆百種』第6巻 東京：米山堂.  
宮尾與男
- 1996 「都喜蝶とその舌耕芸—文政・天保期の京の舌耕者—」.『芸能史研究』133:1-19.
- 1999 『上方舌耕文芸史の研究』東京：勉誠出版.
- 祐田善雄；義太夫年表近世篇刊行会（編）
- 1979～1990 『義太夫年表』第1～5巻、別巻1～2 東京：八木書店.  
早稲田大学図書館（編）
- 1973 『方広寺関係文書目録』東京：早稲田大学図書館.

くろかわ まりえ

お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了。現在、同大学院博士後期課程在学中。  
論文：「近世京都の小草紙屋—阿波屋定次郎の唄本について—」（修士論文）